

イチジク

(黒ボク土)

〔土壌肥料〕

土壌の適応力は比較的大きいが、過湿には弱いため、水はけの良い砂壤土や壤土が適する。一方、茎葉の伸長とともに果実が順次発育していくため、生育期間中は、適度な水分と肥料が供給されることが望ましい。硬盤や停滞水等がなければ、根群分布は全般的に深く、直根が深く入り細根は少ない。生育期間中に養分がコンスタントに供給されるよう、元肥には堆肥や有機質肥料を十分施要する。

土壌表面管理としては、清耕法、草生法、有機物によるマルチ法などがある。土壌中の有機物を増加させ、できるだけ根が深く入るような土づくりを目指す。

〔病虫害・雑草防除〕

病害は比較的少ないものの、カミキリムシ類の被害が大きく、適切な防除を怠ると壊滅的被害となる。また、連作は忌地現象やセンチュウ被害等を招き、生育・収量を著しく低下させるので回避する。適正な整枝・せん定管理を心がけるとともに、品質・収量を向上させるためには、雨よけ施設等の導入も有効である。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○深耕時に堆肥を計画的に施用する。その際断根を極力少なくする。 ○有機物（または堆肥）によるマルチ。堆肥は完熟した低成分含量堆肥（稲わら堆肥及び落葉堆肥等で窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの）を施用する。 	有機物 （または堆肥） 2～3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○根域への表層施用を基本とする。 ○鶏ふん等の有機質肥料による施肥を行う。 ○酸度調整を兼ねたカルシウム補給に有機石灰等を利用する。 	成分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20～50%
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○カミキリムシは、産卵時期に、主幹及び主枝（地上1m位まで）に石灰乳等の塗布を行う。 ○天敵生物を利用する。 ○雨よけハウスのサイドに防虫ネット等を張ることで、物理的防除 	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥や石灰は、落葉後、速やかに施用する。追肥は、生育状況を確認しながら、6～7月及び8～9月の2回を目途に行う。 ○若木のうちは、樹冠下清耕またはマルチ法とし、雑草との養水分の競合をさける。 ○生育期間中は、樹幹や根本からの虫ふん排出や新梢の食害等に注意し、早めにカミキリムシを捕殺する。 ○施肥量の基準は樹齢、樹体に応じたものとする。 	

イチジク (灰色低地土)

〔土壌肥料〕

過湿には比較的弱いので、灰色低地土では滞水被害が起こらぬよう、土壌改良や高畝等により対処する。乾湿を繰り返しやすい粘土質の土壌では、根群分布は全般的に浅くなり、生育が緩慢となる。深層への堆肥施用等により養水分の保持力を高め、生育期に施肥切れを起こさないよう注意する。

土壌表面管理としては、清耕法、草生法、有機物によるマルチ法などがあるがある。土壌中の有機物を増加させ、土壌団粒化の促進を最大限に生かす工夫をする。

〔病害虫・雑草防除〕

病害は比較的少ないものの、カミキリムシ類の被害が大きく、適切な防除を怠ると壊滅的被害となる。また、連作は忌地現象やセンチュウ被害等を招き、生育・収量を著しく低下させるので回避する。適正な整枝・せん定管理を心がけるとともに、品質・収量を向上させるためには、雨よけ施設等の導入も有効である。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○深耕時に堆肥を計画的に施用する。その際、断根を極力少なくする。 ○有機物（または堆肥）によるマルチ。堆肥は完熟した低成分含量堆肥を施用する。 	有機物 （または堆肥） 3t/10a
化学肥料 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○根域への表層施用を基本とする。 ○鶏ふん等の有機質肥料による施肥を行う。 ○酸度調整を兼ねたカルシウム補給に有機石灰等を利用する。 	成分量で施肥基準 以下 有機質肥料併用の 場合には化学肥料 低減率20～30%
化学農薬 低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○カミキリムシは、産卵時期に、主幹及び主枝（地上1 m位まで）に石灰乳等の塗布を行う。 ○天敵生物を利用する。 ○雨よけハウスのサイドに防虫ネット等を張ることで、物理的防除 	慣行使用回数の 20%減
その他の 留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○基肥や石灰は、落葉後、速やかに施用する。追肥は、生育状況を確認しながら、6～7月及び8～9月の2回を目途に行う。 ○若木のうちは、樹冠下清耕またはマルチ法とし、雑草との養水分の競合をさける。 ○生育期間中は、樹幹や根本からの虫ふん排出や新梢の食害等に注意し、早めにカミキリムシを捕殺する。 ○施肥量の基準は樹齢、樹体に応じたものとする。 	